



みんなで作ろう、これからの医療プロジェクト

みんなつくゼミナール3年のあゆみ

～みんなの「こえ」が届く社会に向けて～

2022-2024

1. はじめに：なぜ、みんつくゼミナールが必要だったのか

ごあいさつ

宿野部 武志（一般社団法人ピーベック 代表理事）



今、報告書を読み返し、多くの方への思いがあふれている。

近年、医療や研究、政策などの分野でPPI（患者・市民参画）の重要性が叫ばれているが、唐突にPPIと言われても、何をしたら良いかわからないと感じる人がほとんどではないだろうか。そこで私たちは、PPIの一步手前という意味合いも込め、2019年に「みんなでつろう、これからの医療プロジェクト（以下、PPHプロジェクト：People's Power flow into Healthcare Project）」を開始した。PPHプロジェクトでは、当事者や医療者、研究者、製薬企業関係者、行政など様々な立場の人が集い、PPIの進展と質の向上を目指し議論する中、さらに多くの人を糾合しながら、多様なステークホルダー同士が安心して話せる場作りが必要という共通認識が生まれた。そこで2022年、みんつくゼミナールが始動した。

みんつくゼミナールは、立場の違う人の思いを知り、PPIの経験を分かち合い、交流を通して互いに高め合う場になるよう、当事者目線の運営を心がけた。運営に協力いただいた皆さま、講師として登壇くださった皆さま、参加された多くの皆さま、また、本活動にご協賛くださった企業の皆さまに、心からの感謝をお伝えしたい。

寄せられた期待に応えるため、PPHプロジェクトを通じてさらなる活動を推進していく。引き続きのご支援をお願いする次第である。

発行によせて PPHプロジェクトメンバー
東山 浩之氏（アステラス製薬株式会社）

このゼミナールの3年間のことを思い出しながら、原稿に向き合っている。毎回印象に残るものがあったが、私にとってこのゼミナールは、常に「こえ」のもつ意味を探す場だった。そこには、大きな「こえ」、小さな「こえ」、そして今まで聴いたことのないような微かな「こえ」があった。そして、自分の「こえ」を發し、他者の「こえ」を受けとるプロセスに参加することが、ヒトを変えることもこの眼で見てきた。

その一方、最も影響を受ける人々の「こえ」を軽視した決定プロセスが、まかり通っている現実をこの1年で多くの人は知った。そんな今、強く思うのは「黙っていても誰かが新しい医療をつくってくれることはない」ということである。

私は「こえ」の力を信じている。ゼミナールが終わるのは少し寂しい気もするが、これからも「こえ」が始まりの場所になってほしい、そのために汗をかきたい。その先にこそ「今よりマシな医療」があると信じている。

2. プロジェクト概要

1 みんつくゼミナールの背景・趣旨

近年「患者参加型医療」や、医療、政策、研究等への「患者・市民参画（Patient and Public Involvement, 以下PPIという）」の動きが盛んになり、とりわけ病気をもつ人のこえを様々なステークホルダーの元に届け、協働的に医療環境をつくることへの関心が高まっている。一方で、病気をもつ人や医療者、企業が、それぞれの立場の違いを互いに理解し合い、創造的な対話や交流を行える場は限られている。参画が形骸化し、参画の目的が曖昧なまま進められるケースも少なくない。

私たちピーベックは、病気をもつ人が中心となって家族や研究者らとともに立ち上げた団体であり、病気をもつ人やその家族らの当事者（以下、病気をもつ人と家族を合わせて「病気の当事者」という）を支援している。治療や生活、心理面などの個々の課題に関しては、疾患ごとの患者会が解決に向けて尽力している。一方、私たちは、そうした貴重な活動で得られた成果が社会に必要な場に届くよう、構造そのものにアプローチすることを目指している。疾患横断的に、特に医療・研究開発分野で病気の当事者のこえが活かされるよう、様々な事業を行ってきた。こうした中で参画の質に関するさまざまな課題に直面してきた。

このような背景の下、2019年に発足したPPHプロジェクトでは、病気の当事者・患者会とライフサイエンス企業の協働を推進するための活動を実施してきた。2022年より開始した公開型のオンラインセミナー「みんつくゼミナール」では、1年目に病気の当事者・患者会や医療者、企業のそれぞれの立場の違いを知り、2年目にはPPIの歴史や現状、協働事例などを学び参画意識を高め、3年目は実践的な知識習得と具体的な行動への後押しを目的に、より創造的な対話の場を展開した。

2 開催概要

実施期間

2022年6月
|
2025年2月
全14回

参加者数

延べ970名

対象者

病気をもつ人、家族、
患者会（患者支援団体）、
ライフサイエンス企業の関係者、
医療者、研究者、
興味のある市民

アーカイブ視聴数

合計2,664回
(2025年12月現在)

2. プロジェクト概要

年度別開催テーマ **2022年度** 2023年度 2024年度

病気をもつ人や医療者、企業の立場の違いを知る



第1回（2022年6月4日）参加者数：129名
「『思い込み』と『すれ違い』を無くそう」

轟浩美氏より、医療現場や日常生活で無意識に抱いてしまいがちな“思い込み”と“すれ違い”について具体例を提示しながら解説。清水研氏より、立場の違う人同士が互いを理解し合うためのポイントが4つに分けて紹介された。



第2回（2022年9月4日）参加者数：117名
「PPI（患者・市民参画）っていう前に
～コミュニケーションのズレをどうするか～」

市川衛氏より、同じ言葉でも感じ方がずれてしまう「コミュニケーションのズレ」について実例を交えながら紹介。患者と医療者が言葉を共有する際に気をつけたいこと、すぐに使えるコツが教示された。



第3回（2022年10月16日）参加者数：80名
「思い込みやズレを乗り越えて
納得のいく意思決定をするためには？」

大野智氏より、患者・医療者・ライフサイエンス企業それぞれの立場での「意思決定」の仕組みを様々な“こえ”も紹介しながら解説。心配ごとを伝えるコツや、相談しやすい窓口のを見つけ方など、普段から役立つヒントが網羅的に提示された。



第5回（2023年2月5日）参加者数：72名
「ペイシェントジャーニーから考える
『あの時、必要だったこと』」

天野慎介氏より、ご自身の経験をもとにがん対策基本法ができるまでの道のりを紹介。病気をもつ人の“こえ”が社会を動かした瞬間や、未来のPPIに必要な視点が平易かつ体系的に解説された。



第4回（2022年12月18日）参加者数：44名
「ルールブックチーム制作
『みんなつくる協働ガイドブック』を知ろう」

PPHプロジェクトのメンバーが、多様な立場で言葉を丁寧に選びながらつくり上げた「協働ガイドブック」の背景と使い方を紹介。チームワークの大切さや、対話を深めるポイントが詳述された。

2. プロジェクト概要

年度別開催テーマ 2022年度 2023年度 2024年度

PPIの歴史や現状、協働事例などを学ぶことで、医療への参画意識を高める



第0回 (2023年7月2日) 参加者数：38名
「患者・市民参画 (PPI) とアドボカシーの意義」

当団体理事 武田飛呂城より、日本におけるPPIの歩みや自身の体験を共有。質疑応答では、企業と当事者が互いに尊重し合うための心がまえや、“こえ”を届けるコツについて取り上げた。



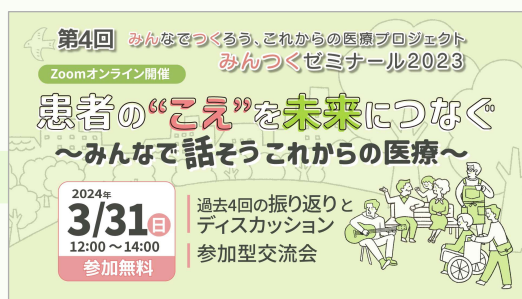
第1回 (2023年10月1日) 参加者数：77名
「患者の“こえ”で社会を動かす」

桜井なおみ氏より、がん向き合いながら働く患者さんの“こえ”をメディアでどう伝え、社会を変えたかを具体的に紹介。多様な人が共に暮らす「ミックスサラダ」のような社会のイメージも楽しく学べる回となった。



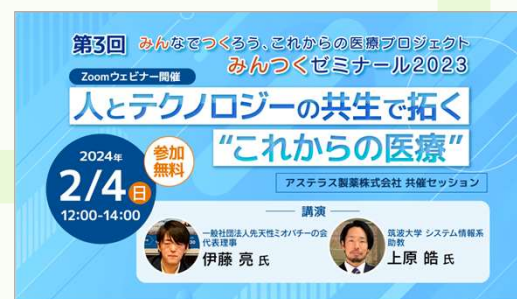
第2回 (2023年12月3日) 第一三共株式会社共催
「共に創る“よりそう治験”のカタチ」参加者数：76名

山崎真澄氏より、がんゲノム医療の現場で感じられる“想い”を、当事者と研究者の両面から紹介。安心して参加できる治験づくりのヒントが得られた。



第4回 (2024年3月31日) 参加者数：38名
「患者の“こえ”を未来につなぐ
～みんなで話そうこれからの医療～」

過去4回をダイジェストムービーで振り返り、「私にできる・やってみたいPPIとは？」をテーマにディスカッションを実施。登壇者が語る経験やアイデアに、これからのPPIをつくるヒントが多数盛り込まれていた。



第3回 (2024年2月4日) アステラス製薬株式会社共催
「人とテクノロジーの共生で拓く “これからの医療”」
参加者数：71名

伊藤亮氏が、先天性ミオパチーを抱えながらの日常を率直に語り、上原皓氏が実際の協働事例（装着型サイボーグHALなど）を解説。テクノロジーが支える新しい医療の可能性を多角的に展望する内容であった。

2. プロジェクト概要

年度別開催テーマ 2022年度 2023年度 **2024年度**

より創造的な学びと対話や交流を通して、立場を超えて互いに高めあう学び合いの場を創造

第1回 みんなでつくる、これからの医療プロジェクト 全4回開催
Zoom オンライン開催 みんなつくゼミナール2024
**医薬品を公平に手にするために、
私たちができること** 講演+ワークショップ
～くすりの未来、みんなで考えよう!～
2024年 **10.27**日 13:00~15:30
講師 小林 信教氏
日本製薬工業協会 産業政策委員会
ドラッグラグ・ロスタスクフォース サブリーダー

第1回（2024年10月27日）参加者数：43名

「医薬品を公平に手にするために、私たちができること
～くすりの未来、みんなで考えよう!～」

小林信教氏より、ドラッグラグ・ロスの歴史や現状を分かりやすく解説。PPI（患者・市民参画）の意義や、日本市場の魅力をどう伝えていくか、参加者と共に考えるきっかけとなった。

第2回 みんなでつくる、これからの医療プロジェクト 全4回開催
Zoom オンライン開催 みんなつくゼミナール2024
**病気をもつ人の
“こえ”が届く社会へ** 講演+ワークショップ
～医療政策と私たちの役割～
2024年 **11.24**日 13:00~15:30
講師 千正 康裕氏
株式会社千正福 代表取締役社長

第2回（2024年11月24日）参加者数：36名

「病気をもつ人の“こえ”が届く社会へ
～医療政策と私たちの役割～」

千正康裕氏より、医療政策づくりの流れをやさしく紹介し、当事者の“こえ”が届けるポイントを解説。具体例と共に、仲間づくりや協働のコツなど、実践に即した多くの知見を得る機会となった。

会場+オンラインハイブリッド開催 みんなでつくる、これからの医療プロジェクト 全4回最終回
**病気をもつ人の“こえ”を
医療の未来に活かす** 初めてでもOK 参加無料
～みんなつくゼミナール総まとめ in 東京～
(ビジョンセンター新橋 | 新橋駅徒歩5分)
2025年 **2.9**日
講師 長谷川一男氏 小村 悠氏 上原 皓氏
NPO法人がん患者の会アンスタップ 理事長 国立がん研究センター(国立がん研試)がん予防・検診部 部長 東京大学 システム情報系 助教 国立がん研究センター(国立がん研試)がん予防・検診部 部長

第4回（2025年2月9日）参加者数：76名

「病気をもつ人の“こえ”を医療の未来に活かす
～みんなつくゼミナール総まとめ in 東京～」

長谷川一男氏と小村悠氏がそれぞれの立場からPPIの実例を講演で紹介。パネルディスカッションではこれまでの学びを振り返り、研究者らと交えて、この先3年のPPIについて活発な意見交換がなされた。

最終回
ハイブリッド開催

第3回 みんなでつくる、これからの医療プロジェクト 全4回開催
Zoom オンライン開催 みんなつくゼミナール2024
**研究者と病気をもつ人の
対話コトハジメ** 講演+ワークショップ
～患者市民参画が当たり前になる社会を目指して～
2024年 **12.15**日 13:00~15:30
講師 武藤 香織氏
東京大学 科学研究所 公共政策研究分野 教授

第3回（2024年12月15日）参加者数：43名

「研究者と病気をもつ人の対話コトハジメ
～患者市民参画が当たり前になる社会を目指して～」

武藤香織氏が〈疾患〉と〈病い〉の違いを解説し、研究者との信頼関係を築くためのポイントを具体的に紹介。安心して対話できる環境を醸成するための指針が示された。

3. 「みんなでつくる」場の実践

1 企画段階からの多様な参加者の参画

ゼミナールの企画には、病気の当事者はもちろん、医療者、ライフサイエンス企業の関係者、市民など多様な立場の参加者が参画した。

2 企画設計の意図

① 企画の目的

ゼミナールは、あくまで病気の当事者主体で、PPIへの敷居を低く、間口を広くすることを目的に開始した。専門家を養成する場ではなく、PPIへの心理的な敷居を下げ、誰もが参画への一歩を踏み出すきっかけとなるような場を目指した。

② 内容と方針

各回の内容は、PPIの技術的・制度的な説明にとどまらず、前段階としてのコミュニケーションや相互理解の重要性、障害者運動の歴史など、多岐にわたった。多様な視点から、時に社会的・哲学的な問いかけも行うことで、参加者それぞれに「参画」することの意味を考えてもらうことを重視して開催した。回を重ねる中で、多様な登壇者によるPPIの具体的な実践内容も紹介したが、特定の立場に偏ることなく、多くの実践例を知ることによって相互理解を進めていった。ひとつの正解を提示するのではなく、事例を提示し、参加者に持ち帰ってもらうようにデザインしており、学び方、受け止め方は参加者の主体性に依っている。

③ 実施の工夫

参加者が「組織の代表」としてではなく、「一個人」として安心して参加できる場の設計を重視した。ゼミナール全体で、ライフサイエンス企業に所属する参加者が半数以上を占めていたため、毎回の冒頭でグランドルールを確認し、プライバシーの保護や薬事に関する情報規制を事前に説明した。こうした共有が、心理的安全性を高め、議論に集中できる場をつくることへつながった。

また、ゼミナールでファシリテーターを行うメンバーには事前にレクチャーを実施し、

- ・肩書ではなく、〇〇さんと呼びかける
- ・一人一人の話を尊重し、すぐに話し出せない人もいることを理解する
- ・全員に発言の機会を保障する

といった、一個人として参加しやすくするためのルールを共有した。

こうした実施の工夫により、安全な場で、個人としての発言が尊重されることが保障され、実際に活発で多様な議論が交わされた。このことは、後述の参加者アンケートからも確認できる。

④ 他団体とのすみわけ

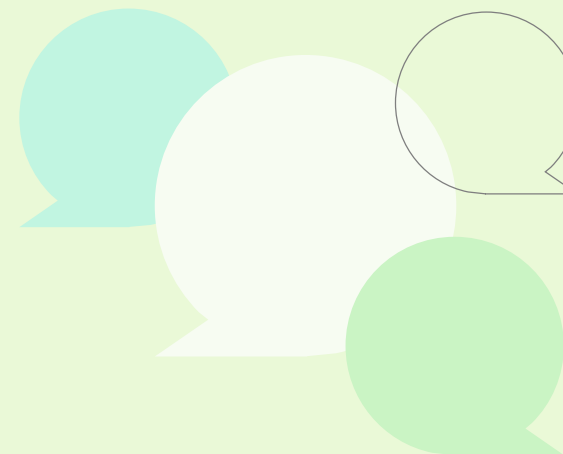
私たちがゼミナールを開始する前後より、国内でもPPIを推進・教育する複数の団体が発足している。私たちの活動は、専門知識を体系的に教育する場ではないが、特定の患者コミュニティに所属しない病気の当事者、市民や、PPIは無縁と思っている人々にもアプローチできた点に特徴がある。

とりわけ、当事者が主体となって取り組んだことで、制度の習得や方法論にとどまらない、当事者の想いや経験に根差した実践的な議論を深めることができた。

3 参加者の声（アンケート抜粋）

上記の場のデザインに関して、参加者から下記のような意見があった。

- みんつくゼミナールに参加するたびにPPIの本質を学べる気がします。
- 学びや気づきを経てきた数年間だったので、これからは多くのひとが実践につながる機会が生まれるといいな、と感じました。100人いれば、100通りの価値観があるので。
- 立場の違う人と理解し合うのは容易ではなくて、清水先生（注：2022年第1回講師）ですら怖いという気持ちがあることはある意味安心した。そんな中でPPHプロジェクトでは立場の違うメンバーでお互いを理解し合いながらプロジェクトを進めていることは素晴らしいと思った。



4. 私たちが築いた対話の土壌 -ゼミナールがもたらした文化・行動変容-

本報告では、定量指標に表れにくい、個人の意識変化や関係性の構築などの変化に注目したい。以下、様々な立場で携わったメンバーからのこえを紹介する。

1 PPHプロジェクトメンバーのこえ 轟 浩美氏（認定NPO法人希望の会）

PPIという言葉を目にする機会が増える中、自分はどうしたらいいのかという声も届く。行動変容に繋がるには『その人の心が動くこと』が何より大事なのだと考える。

みんつくゼミナール第1回の【PPIっていう前に】。一緒に行動することでPPIができていく気持ちになることが一番の足踏みだと考えるきっかけとなった。最重要なのはお互いの違いを敬えるか。立場が違えば見えている景色も違う。それぞれの違いを知ることこそ可能性と視野を広げる鍵なのだという意識を持って取り組めるか。このことは病気を持つ人同志にも重要なのだと気づいたのがPPHプロジェクトを通じて私が得た視点である。背景が違って、行動が違って、目指す未来が同じなら違いこそが大きな力となる。

PPHプロジェクトでの気づきが私の背中を押し、今は国内のみならず国際的な協働にも挑戦中である。誰一人取り残さない社会を目指し、これからも違いを力に変えられる出合いを模索していきたい。

2 ピーベックメンバーのこえ 大村 詠一

幼少期から1型糖尿病を抱えてきた私は、みんつくゼミナールの運営や参加を通して、自分がこれまで自らの疾患に関係する分野だけに目を向け、狭い世界でのネットワークにとどまっていたことに気づき、悔しさを覚えた。しかし、多様な立場の「こえ」に触れることで新しい考えが生まれる面白さに気づき、視野が広がった。

積極的に発言する講師や参加者から刺激を受け、自身が立ち上げた糖尿病アドボカシーグループにおいては、疾患の種類による分断を生まない対話の場を模索している。

PPIが広がる中で、「自分は何ができるか」「何から始めればよいかわからない」といった「こえ」もあるが、行動のきっかけは対話を重ねて「心が動くこと」にあると考えている。みんつくゼミナールで学んだ対話の可能性と、対話を生むための安心・安全な場づくりの重要性を大切に、今後のピーベックの活動に活かしていく。

3 参加者のこえ（アンケート抜粋） 参加者の変化を、下記の4つに分類してアンケートより一部抜粋して紹介する。

Confidence（自信）

- このような場があったことを知り、多少勇気づけられた。
- 製薬会社でPPIを推進する立場として、患者さんの声を聴くことが打ち上げ花火化しないよう、具体的事例を言語化しているのですが、手間がかかるため、ある程度貯まったら止めようかと思っていました。しかし、このような地道なことを続ける必要性を改めて認識したので、継続していきます！
- 今後の治療においての自分の（小さな）指針ができたように思います。いつも素敵な場がありありがとうございます。

Challenge（挑戦）

- これまでもこのようなイベントに参加しているので、医療関係者と患者側の認識のズレが課題であることは把握している。イベント参加者は改善が期待されるが、それだけではこの課題は解決されないと思う。医療現場に根ざした活動や取り組みについて、製薬企業も含めて、何かできないか、考えていきたいと思った。
- 自ら良いものは学び・取り入れながら、このPPHプロジェクトのような日本オリジナルの仕組み作りの一翼を担えれば幸いです。
- 医療従事者ですが治験と医療は別物の認識があり、ここを解決する方法について考えさせられました。
- モチベーションの原点になっています。
- 医療経済という問題点、日頃から感じていたところを改めて深く切り込んでいただき、今後一人の国民として無視できないことだと痛感しました。国民全体で合意していくために、どうしたらいいのか、これから先自分でできることを考えていきたいと思っています。

Connection（つながり）

- 直に聴いた当事者の声を身近な周りの人に伝え、1人でも多くの人にPPIに興味を持ってもらえるよう働きかけを続けたいと思いました。
- 医療機器やデイケア、心理カウンセラーや口腔ケア関連などの企業も巻き込めたらいいと感じました。
- バイアスのかからない対話の場で語り合うことが重要であるとあらためて認識し、自分にとってはPPHへの参加がそれに当たると感じます。
- 「みんつく」プロジェクトが機会を提供してくださったおかげで、あらゆる立場の方々とのコミュニケーションが生まれますし、より良い環境作りに発展していけるキッカケになっていると思います。

Contribution（貢献）

- 本日の情報を基に、自主的に勉強すると共に、職場のメンバーにも少しずつ共有したいと思います。
- 「患者さんの声」を聞いたとき、一過的なイベントになってしまい、継続が難しいと感じています。同じような課題を持っていること、それに対してコミュニティでつなぐことの重要性を気付く機会となりました。なんとか、社会に還元できる仕組みを考えたいです。
- すぐに何か行動できることはございませんが、めぐりめぐって患者さんや医療スタッフの皆様、支援されている皆様に役立ちたいです。
- 今後も、薬のみならずアラウンドピルも含め、患者さんのためになるものは何なのか？考えていきたいと思っています。

5. これからの医療に向けて - 総括 -

本ゼミナールの取り組みを通じて見えてきたのは、これからの医療における、病気の当事者を含む多様なステークホルダーが対等に対話し、ともに考える場の重要性である。

PPIは、制度や枠組みの整備だけでは進みにくく、それぞれの立場の違いや背景を理解しあえるコミュニティの存在が必要である。ゼミナールでは、専門知識や肩書を一度脇に置き、一人の人間として関わることができる対話の場づくりに努めてきた。こうした空間が、参画の入口を広げ、多様な当事者が安心してこえを出せる環境づくりにつながっている。

また、講演やワークショップでは、病気の当事者、医療者、行政、研究者、企業など、それぞれの立場から見たPPI実践のヒントが多数共有された。PPIに取り組む際の具体的な工夫や課題が語られることで、参加者は自分の現場でのアクションの糸口を見出している。

さらに、行政や研究への当事者参画の好事例を共有することで、PPIが特別なものではなく、日常の延長線上にある実践として捉えられるようになり、参画への心理的なハードルの軽減にも寄与している。

ピーバック自身も、企業・研究者が作成する病気の当事者向けの文書の事前レビューや対話会など、PPIを具体的に進める実践を継続しており、関係する企業・研究者にとっての参照事例ともなっている。参加者からは、実際のプロセスを知ること、自分たちにもできるという感覚をもてたという声が多く寄せられた。

一方で、PPIを進める中でたびたび議論となるのが、当事者の声の「代表性」に関する懸念である。たしかに、政策決定の場においては、専門知識をもち、当該分野に精通した当事者の関与が求められる。そうした役割を担うべく、患者会のような組織が個別支援の積み重ねを通し、課題を集約し、社会に発信してきた。

しかし、組織やその「代表」がどれほど尽力してもすくいきれない「個」、こえにならないこえが存在することを忘れてはならない。PPIを推進する上では、目の前の一人一人の個別の経験・こえを大切に、複数の多様な当事者のこえを丁寧に聴くことが重要である。これを繰り返すプロセスこそが、PPIの本質である。代表性の保障ばかりを優先すると、多様であるべきPPIの実践を阻害してしまう。私たちは、代表性という名の存在し得ない幻に抗し、現実の一人一人と向き合い、彼/彼女らが抱える困難やその人生の豊かさに触発され続けていくことによって、真のPPIが実現できると考えている。

そして何より、PPIの取り組みは「楽しい」ものであってよい。学び合い、対話し、異なる意見を受け止め、共感し合う中にこそ、これからの医療のヒントと、想像を超える可能性に満ちた未来があると思う。



みんつくゼミナール2022第2回



みんつくゼミナール2022第3回



みんつくゼミナール2023第3回



みんつくゼミナール2023第4回



みんつくゼミナール2024第3回



みんつくゼミナール2024第4回（最終回）

ご支援・ご協力のお礼

みんつくゼミナールは、以下の皆さまのご協力のおかげで活動を行うことができました。皆さまの真心からのご尽力に、心より御礼を申し上げます。

ご協賛・ご支援企業

アステラス製薬株式会社

アストラゼネカ株式会社

EAファーマ株式会社

イーピーエス株式会社

ギリアド・サイエンシズ株式会社

グラクソ・スミスクライン株式会社

サノフィ株式会社

大正製薬株式会社

武田薬品工業株式会社

第一三共株式会社

鳥居薬品株式会社

日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社

ノバルティス ファーマ株式会社

ファイザー株式会社

ブリistol・マイヤーズ スクイブ株式会社

(五十音順)

ご登壇・ご協力いただいた皆さま ※役職や所属は、ご登壇・ご協力当時のものです。

天野 慎介 氏 (一般社団法人グループ・ネクサス・ジャパン 理事長)

市川 衛 氏 (READYFOR株式会社、一般社団法人メディカルジャーナリズム勉強会代表)

伊藤 亮 氏 (一般社団法人先天性ミオパチーの会 代表理事)

上原 皓 氏 (筑波大学 システム情報系 助教)

大武 陽一 氏 (たけお内科クリニック からだと心の診療所 院長)

大野 智 氏 (島根大学医学部附属病院 臨床研究センター教授)

小林 信教 氏 (日本製薬工業協会 産業政策委員会 ドラッグラグ・ロスタスクフォース サブリーダー)

小村 悠 氏 (国立がん研究センター東病院 スタディマネージャー)

桜井 なおみ 氏 (一般社団法人CSRプロジェクト 代表理事)

清水 研 氏 (公益財団法人がん研有明病院腫瘍精神科部長)

千正 康裕 氏 (株式会社千正組 代表取締役社長)

田中 亮一 氏 (第一三共株式会社 研究開発本部)

轟 浩美 氏 (認定NPO法人希望の会)

長谷川 一男 氏 (NPO法人肺がん患者の会ワンステップ 理事長)

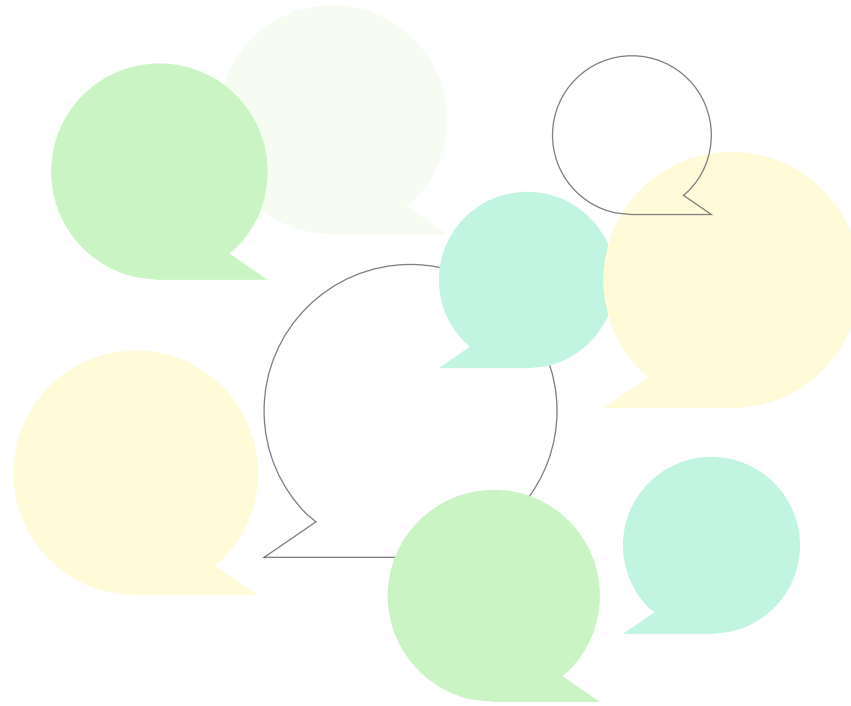
前田 留里 氏 (特定非営利活動法人京都ワーキング・サバイバー理事長、
一般社団法人全国がん患者団体連合会理事、がん対策推進協議会委員)

武藤 香織 氏 (東京大学医科学研究所 公共政策研究分野 教授)

山崎 真澄 氏 (がん研有明病院 ゲノム診療部 がんゲノム医療コーディネーター 企画戦略部 CRC)

(五十音順)

みんなでつくろう、これからの医療<People's Power flow into Healthcare : PPH>プロジェクトメンバーの皆さま



みんなで作ろう、これからの医療プロジェクト

みんなつくゼミナール3年のあゆみ ~みんなの「こえ」が届く社会に向けて~

発行日 2025年12月26日

発行者 一般社団法人ピーペック

住 所 〒157-0062 東京都世田谷区南烏山6-33-1 サンライズプラザ501

電 話 03-6279-5669 (受付時間：平日10時~17時)

メール info@ppecc.jp ホームページ <https://ppecc.jp/>

みんなつくゼミナール 特設ページ

<https://mintsukuseminar.studio.site/>



各回の
アーカイブ動画も
こちらから！